

原五紙銀錢十五月一銀貳金部一價定
錢十五行一詰字三十號五料告廣
日登ノ日祝祭大曜日刊休
治文時川人副印人購閱衆行發
五三町橋長町平部城石縣島福
番〇三六話電社聞新日每警常 所行發

寄書

外交上より
觀たる倫敦條約

山田耕三

不肖は營利會社に離脱たる生活を營む市井の一面に過ぎず固より政黨政派に何等の關係なく、又言論界に些の交渉なし唯倫敦條約に關しては國家前途に思を潜むる國民當然の赤誠、轉た禁する能はざるものあり、自ら井底の痴蛙たるを度らず社務の間禿筆を呵して所信を屬す、憾らくは詳説細叙の暇なく鍛鍊推敲の餘裕なきを乃ち粗枝大葉敢て先輩長友の高教を乞はんとす。庶幾くは微衷を憫み御垂教に吝なる勿らむことを

抑々皇國の外交政策は國際關係の滿蒙に於ける我が既得權と太平洋に於ける海上權に及ぼす影響を以て消極的標準と爲さざるべからず、蓋し皇國の存亡は此既得權と海上權との安危に依て岐るればなり。列國との親善協調、我が經濟の發展向上に關する政策の如きは固より希ふ所なりと雖國家

存亡の問題と日を全ふして語るべからざるや必せり。

頃者外交を論ずる者、動もすれば歐洲大戰に於ける獨逸の例を引き、列國との協調親善を破つて孤立するもの、遂に國を亡すべしと爲し、協調親善なる標語を以て、我が外交の第一義諦たらしめんとするものあり而して其甚しきに至つては協調親善なる語に自ら陶醉して我が存立の必須條件たる滿蒙既得權、と太平洋上に於ける海權とを危殆ならしめんとす、何ぞ思はざるの是より甚しきものあらんや、獨逸の孤立は自ら妄に率を好んで他國の存立を脅かし徒に國際政局に於ける勢力の均衡を破りたるに職因し、我が國の存立上に於ける必須條件を擁護するに比すべからざるは智者を俟つて而して後知るべきに非ざる也、協調親善固より良しと雖自國の存立上に於ける要件一度缺くれば、協調親善直に破れ、國際間の危機忽にして殺倒すべし是れ國際間の協調親善は一に勢力の均衡を以て其基調とすればなり

常警文藝

秋刀魚やく家

片寄歌二

◇給料をもろて明るく秋刀魚焼く家のおもてを急ぐわが家へ
◇今日も姉秋刀魚をやくかむらさきの煙で暗い家に歸つた
◇家毎に秋刀魚を焼いて此の小路つ、まじやかな夕餉となつた

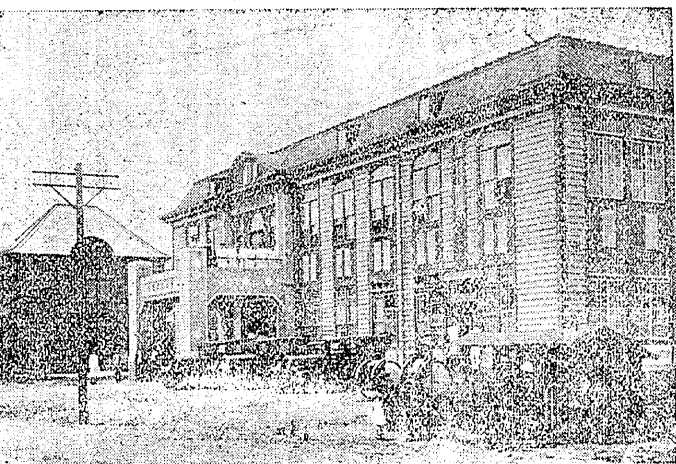
◇ほんのりと遠くの街の灯が見えて雨の夜汽車は廣野を走る
◇ほとほとに疲れた人だけ寄つて来て年一回の淋しい報恩講

磐城共濟病院案内

本病院は時局に鑑み八月一日より入院料並に往診料左の通り低減致候間御参考迄申上候
入院料 一日(本會員)金貳圓也
往診料 本院及日附の(一般金參圓也)博士に限り(本會員)金貳圓也(平町内)

往診料

尙地方往診も之れに準じ低減致候間此段申添候



(各科専門) (醫擔當)
内 外 小兒科
皮膚泌尿科 整形外科 內臟外科
産婦人科 女子泌尿科
耳鼻咽喉科
×光線科
物理學的診療科

院長 醫學博士 難波 睦
本院主 管 賀澤 忠治

一、衛生試驗所
二、病氣相談所
三、救療所
共濟病院内

昭和五年九月

磐城共濟會

看護婦募集

平町 電話六四一番

貸切は他の追従を許さざる破格最低料金の
磐城タクシーへ
電話四五四番
平 驛 前

電話四五四番

ラチウム温灸器

胃腸病の必治法
一貫や三貫らくく肥る世界的健康法

特約治療部
福島縣平町白銀町九
志賀齒科醫院
産婆 關口悦子

「温灸治療法」百三十頁の美本無代進呈

中村、福島間定期乗合自動車

木場自動車部内に營業所を置きました。御用の節は電話二三九番に願ひます
(料金中村—福島間片道一圓五十錢小人半額)

中村 木場自動車部内

福中自動車部

チドリ自動車部

電話二三九番
中村發、前六、三〇同八、三〇同二〇、三〇後二、三〇同四、三〇同六、三〇同八、三〇同一〇、三〇同一二、三〇同四、〇〇同六、〇〇同八、〇〇同一〇、〇〇同一二、〇〇同四、〇〇同六、〇〇

審査決定した 貸出五萬圓

來月二日から交附

最高は...一千圓
最低は...五十圓

けふ申込人に通知

平信用組合庶民金庫に對し
中小商工業業資金の借受申
込者は百七十四名あり其額
十五萬六千七百圓に達する
が其内借受資格に該當しな
い辯護士、醫師、中等教員
等及び從來の
償還が 不成績であ
つた者等合して十三名を除
外し残る百六十一名に對し
割當額の五萬圓を按分配當
する事となり這般來理學會
を開いて

一、組合に對する拂込出
資額
二、本人の信用
三、保證人の信用
四、擔保物件
五、償還成績
等の各條項に照らして嚴重
な審査を行った結果最高一
千圓、最低五十圓(申込は
最高一千五百圓、最低百圓)
を夫々貸出す事に
決定し 本日申込人
に對して通知狀を發送した
が貸出金は來月二日から七
日迄の間に申込順に依つて
交付する筈であるから不景
氣の折柄平町にバラ撒かれ
る五萬圓の金は干天續きに
降る慈雨の如く可成り大き
な働きを爲すであらうと見
られて居る因に償還の
方法は 三ヶ年間に
完済すべく百圓に付一年目
は十五錢、二年目は十二錢
三年目は十一錢宛日掛けを
以つて納入する事になつて
居ると

湯本温泉が毎月 百圓宛を馨炭へ

送湯發電料の一部とし 已むなく昨日承諾

湯本温泉は磐城炭礦のキモ
煎りて舊三星炭礦の坑内に
湧出する温泉を鐵管に依つ
て送つて貰ひながら辛ふじ
て潤渴を免れて居り
温泉地 としての命
脈をつないで居るが馨炭側
としては是れが爲めに毎月
二三百圓の送湯料を必要と
し不況の折柄無償で送湯す
る事が容易な負擔でな
い所から數日前から毎月百
圓宛の支出方を湯本町に交
渉中の處昨日湯本町で
區會を 開き協議の
結果止むなき事情であるか
ら承諾の外あるまいといふ
事に一決し其旨馨炭側に回
答を發した由

橋本警中校長 今晚歓迎會

同志會有志が
警城中學校同志會有志は本
廿七日午後六時から同校職
員と合同して新任校長橋本
文壽氏の歓迎會を谷口樓に
開催する由であるが希望者
は會費三圓であるから奮つ
て出席ありたしと

藥草に中毒 嫁の親切が仇

頻死の病床に 氣味悪く笑ふ

石城郡西郷村大字宮字宮の
澤警城炭礦坑夫三浦齊の母
モト(三)は數年前からゼン
息病に罹り非常に惱んで居
た處去る十日午前七時頃同
村理髮店草野竹次方便所傍
らの
塵捨場に 生い繁つ
た草がゼン息の良藥だとて
附近の者が採つて居るのを
通り掛りに見た息子の嫁ヨ
シ(二)が母にも用えてゼン
息の苦患より免れしめんと
其の草を採り軒下に干して
廿五日午前十時頃熱湯に煮
出し服用せしめた處二三時
間後俄かに苦しみ出し瀕死
の重態に陥り馨城炭礦の附
屬病院に入院
應急手当 を受けた

婦人講演會

アレン女史來平
平町材木町バプテスト教會
にては信榮幼稚園長のアレ
ン女史を迎え今廿七日午後
七時から婦人の爲め講演會
を催す由
電話申込み
タツタ二口
近々中架設
既報平局の架設電話申込み

銅像除幕式

等身大座像
平町搔毬小路平陽女學校同
窓會發起の許に御大典記念
として校主酒井ミヨ女史へ
の報恩事業の一端に校庭東
端に同女史の等身大座像を
建設すべく準備中の所既に
去る七月中基礎工事を了し
鑄造を終へた爲め十一月十
旬を期して除幕式を執行す
ると因に原型は本多朝忠氏
の製作せるものであると

平署員今朝から 急に強くなる!

捕手術を修得して
サア何者でも來れ
今廿七日午前八時から平警
察署に捕手術の名人警視廳
囑託濱島兼雄氏と稱する凄
腕が訪つた署員に拳闘術や
唐手を傳授して立去つた、
逆手四十八手すつかり修得
した平署員令度は何もので
も來れと—えらい勢ひ、
うつか、近所も通れない

失業者賭博

今朝檢舉さる
石城郡好間村大字北好間字
南町田大友まさ(三)方にて
今曉一時頃古河炭礦の失業
坑夫である左記の者等に前
記まさも加つて花合賭博開
帳中駐在巡查に逮捕された
長瀬峯吉(三)北岡才一郎

平の映畫界

平館 松竹特作佐藤紅
綠原作島津保次郎監督栗
島すみ子主演「麗人」林長
二郎の「伊勢音頭」日活作
品楠英二郎主演の「はな
いくさ」以上三本廿五日
より
有聲座 マキノ物三本
は小唄映畫大貫憲二主演
の「腹の立つ忠臣蔵」それ
に月形侯陽の「鼠賊道中
録」以上希キネ時代物松
本田三郎主演の「雄登見」
で以上二十六日より上映

スポンヂ野 來月廿六日に

既報第五回石城郡下スポン
ヂ野球大會は來月廿六日午
前八時から警中及び平第一
の兩球場にて開催する筈で
出場チームは來月廿日迄に
會費一チーム一圓を添えて
大塚運動具店に申込ありた
しと因に今迄の優勝チーム
は左記の如くである
(第一回)揚士俱樂部(第三
回)南町俱樂部(第四回)
警炭礦務課
佑賢の同志會 平町
舊城跡警城佑賢學舎にては
明廿八日午前八時より同志
會を開き卒業生の所感演説
及び餘興等賑々しく演ぜら
れる筈

四倉蘭市況(廿六日)

(總貫數)四十九萬九千七
百(高値)一圓八十九錢
(低値)一圓六十五錢(平
均)一圓六十九錢(累計)
二萬二千三百廿七圓六百
廿九
常磐片々
焼け石に水の五萬圓、セメ
テ湯氣が立つだけでも有難
し
喘息の藥草、死んでから癒
るでは間に合ふまい
湯本町が馨炭へ湯の出る代
りに血の出る金毎月百圓宛
惨い
炭礦の失業者發奮して—
バクチャ打ち

國調豫習檢閲

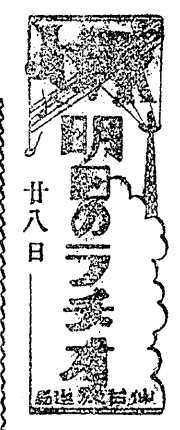
平町
國勢調査委員は本日午前十
時より團體事務所樓上に集

廣告折込み及びチラシ全部一手指受

漏れなく責任配布

折込は百枚に付十銭

常磐毎日新聞社



今晩も明日も南東の風晴れたり曇つたり

- △前九・一〇 榮養料理「鯛のキャベツ巻」榮養研究所
- △前九・三〇 お話「汽車の歴史」鐵道省技師工學博士朝倉希一
- △前一〇・〇〇 修養講座「歌ひつゝ歩まん」中田重治
- △前一一・〇〇 講演「日本固有の精神に歸れ」千葉命吉
- △前一一・五〇△後六・〇〇 運動競技「六大學野球リーグ戦状況」早立二回、明法二回
- △後六・〇〇 子供の時間
- △後七・二五 音樂名曲講座「ショパン」ストロビウツシの洋琴名曲」野村光一、小野田沖子
- △後八・二五 琵琶「山科の別れ」宇田錦崇
- △後八・五〇 ラヂオドラマ「みをつくし」新東京劇團
- △後九・四〇 時報氣象通報番組豫告生蘭相場

（講演） 日本固有の精神に歸れ

千葉 命吉

千葉氏は教育評論家として知られてゐます

日本は今や諸種の國難の襲ひ来る所となつてゐます。これ等の國難を取り去る手段はたゞ一つ私共國民の心の持方の外にないと思ひます。

經濟的 壓迫が目前に迫つて來てから、國產愛用を如何に叫んでも遅いのです。政治が腐敗してから、選舉廓清を叫んでも効果が少ないのです。思想の方向を誤つてから、思想善導を叫んでも間に合ひません。私共は余りに遠慮し過ぎると思ひます。もつと遠

日本人

の内にある處の根本的なもの即ち日本固有の精神の外にありませぬ。

逆まく大浪の打ち寄せる暗夜の航海！たゞ一つ北辰の輝くものをめあてに進むのみです。まよひまどふ日本たゞ一つの羅針盤は日本固有の精神に外なりませぬ。抑も日本固有の精神は一言にして之を表はせば「むすび」です。然らば「むすび」とは何ものでせうか、生々化々として至上至高の價値の自ら創造することであり、むすびのむすびはこけむすのむすで生へうまるゝの意、ひは不思議微妙、さればむすびは不可思議な生命のはたらき、つまり新しくうみ殖す

作用で あります。それと共にこれはまた一切のものをするといふ作用をもしてゐます。すびはすべるでむは至上最高の義、至上最高にして一切に妥當するものは眞善美の價値なれば、むすびは亦價値そのものです。半面は價値の妥當性であり、他の半面は生々化々の嶄新性である、所のむすびは、言を代ふれば價値を新しく造ること即ち獨創の外にありませぬ。

高天原の昔から三千年の今日まで上一貫のみちはこの「むすび」即ち獨創にあります。日本固有の精神に歸れとは畢竟するに、この「獨創」に歸れといふことに外なりませぬ。忠孝一本とか情義不殊とかは全くこの「むすび」の意に外なりませぬ。新しく

文化の

内容を創造するでなかつたら、日本は今日の難局を救ひ得ないでせう。「獨創」とは經濟的の發明、科學的の發見、宗教的の開基、政治的の統整、藝術的の創作、道德的の實踐であり、今その一二の例を以て、如何に日本固有の精神を發揮することの目下の急務なるを明かにいたします。

ラヂオドラマ
みをつくし
（久保田萬太郎作）
出演 劇團新東京

「兼床」の主人兼吉は女房おさきとの間に兼太郎といふ子供があつたおさきが丹毒と云ふ病氣で死んだ後、おさきの父親喜和藏は兼吉に再婚をすすめた、兼吉はおさきのことを思つて中々に聞き入れなかつた友達の九萬治はその間にたつて共々に兼吉と喜和藏との間をとりなさうとした、雨の多い九月の末頃のことだつた。

十二月月上旬霜の深い晩のあるそば屋では近所の者が五六人上つてゐた、兼吉もその中におゐてひどく酔つてつれてゆく、兼吉は死んだおさきの親父の喜和藏が、おさきの妹を藝者にしたことを深くうらんで自棄酒と云つた形なだつた。さうして月日はたつて翌年の六月、近所の祭禮の囃子が

聞える、兼吉の家、それは昨年の家とは似つかぬ位の整つた麗きおびた住居となつた。喜和藏は久しぶりでこの家へ來た、兼吉は喜和藏のすゝめた再婚はことなつた、もつともつと不幸になることを考へてはつた、しかし子供の片親だけの生活をあはれに思つて新しく女房を持つことにきめた、それは不幸せどころか、幸せな明るい生活になりかけてゐる、喜和藏も喜んでその祝ひにやつて來たのであつた。そしておさきの妹のおさきは、兼吉が一生女房を持たないといふのをきいて自分から藝妓になつたといふことをきいて兼吉は、そんなことは露ほども知らなかつたことなので、もつとき、かへさうとしたが、喜和藏はそれはいいはなかつた、そして死んだおさきの事を思ひかへした

この芝居は久保田萬太郎氏の日常生活を材料にとつたもので一人の男が二人とない女房を死なして世間や人間から絶望して再び近よらなかつた世界に、不幸ばかりではなく、幸せな世界が展かれたといふ主題を靜かに物語つたものである。

新築落成

双葉修齊女學校
長塚村電話一八番

廣告

來る九月廿八日午前八時第卅二回同窓會を開會す此廣告を以つて通知に代ふ
昭和五年九月

磐城佑賢學舍同窓會

移轉廣告

外科 性病科 科
×光線科
平町田町（赤心堂病院跡）
安齊外科醫院
電話四七五番

和製 五色椀は、和久井屋
平町三丁目
電話四七五番

渡邊忠次郎儀 本日葬送の
際遠路に不拘御會葬被下殊に御香奠を辱ふし難有奉存候早速拜趨御厚禮可申上處混雜中に付乍略儀以紙上不取敢御禮申上度如斯に御座候
昭和五年九月二十七日
平町三丁目裏
渡邊忠吾
外親 戚 一同

